2023年
8月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎６月の聖書日課：（ホセア書、テトスへの手紙、ピレモンへの手紙、ヨエル書、ヘブル人への手紙）
◎土・日曜日の学び：（神が造られた世界）の感想です。

祭司、大祭司、幕屋、神殿は旧約聖書によく出て来ることばです。神は幕屋の内におられ選民の移動と共に移動しました。その後、神殿が建てられ、そこが神の住み家とされました。神殿は聖所と至聖所に分かれており、年に一回汚れの無い動物を屠(ほふ)り、その血を神殿の中の贖罪蓋(しょくざいがい)に振りかけ罪から聖められ神との面会が出来たのです。

一方、イスラエルの民がエジプトを出てカナンの地に向かう途中、シナイ山で神からモーセを通して律法を授かりました。律法は二枚の石の板に刻まれ幕屋に納められました。律法を守れば人は祝福されると云うものでした。

しかし律法は罪定(つみさだ)めするだけで、人を救う力はありませんでした。パリサイ派、サドカイ派からなるユダヤ教は、この律法が大切でこの律法を守ることに執着(しゅうちゃく)しました。救いは行いによると考えたのです。

時代的には、統一王国であったのが北王国イスラエルと南王国ユダに分裂してしまいました。原因はやはり権力争いと、神への不信仰、偶像礼拝によるものであり、当然、聖なる神は愛のムチを振るいます。

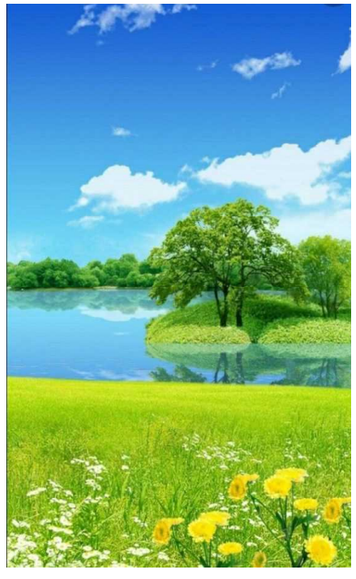
選民であるイスラエルは、周辺諸国によって滅ぼされ、捕囚の身となります。神はアブラハムとの約束に従い神の民を亡ぼしはしません。捕囚されましたが、やがて解放の時を迎えます、人々は身の振り方を考えました。その地に残る者、母国に帰る者、妻の国に帰る者、様々でした。

そんな中、ヘブル人の手紙は書かれました。（ヘブル人、ユダヤ人、イスラエル人はほぼ同じ意味だが、ヘブル人は国境を越えて来た者の意味を含む）著者は不明です。

そしてついに、シナイ契約とは別にダビデの家系から救い主が現れ、新しい契約が樹立するのです。動物の血じゃなくて、ご自分の血で罪を洗い流し、人間を神への反逆から一変して神に愛され神との平和に導く契約なのです。それはメルキゼデクにも勝る大祭司イエス・キリストです。

「民はレビ族の祭司職に基づいて律法を与えられました。もしその祭司職によって完全さに到達できたのなら、それ以上何の必要があって、アロンに倣(なら)ってではなく、メルキゼデクに倣(なら)ってと言われる、別の祭司が立てられたのでしょうか。祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければなりません。私たちがこれまで語ってきた方は、祭壇に仕える者が出たことのない、別の部族に属しておられます。私たちの主がユダ族から出られたことは明らかですが、この部族について、モーセは祭司に関することを何も述べていないのです。

もしメルキゼデクと同じような、別の祭司が立つなら、以上のことはますます明らかになります。 その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらず、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。」
（ヘブル 7:11-16 ）



この方は人間の手で造られた幕屋や神殿には住みません。この方は天におられる父なる神の右に座しておられます。そしてこの方は天に於いて地上での我々の生活を全知全能の力を発揮し、一部始終掌握(しょうあく)し、我々に聖霊を通して働きかけ、勇気づけ、励まし下さいます。

イエスの福音を中心とするキリスト教が台頭して来てヘブル人の中にも、キリスト教を信じる者も増えてきてました。だが、最初のうちは迫害に遭っても耐えていましたが、やがて耐えられなくなり、信仰を捨てる者や、ユダヤ教に後戻りする者も出て来ました。

著者はこのような状況下で読者を励まして、信仰に留まらせキリストの救いはユダヤ教の祭儀よりはるかに優れたものであることを示しました。（畑中伸之）

ヘブル人への手紙について。「ヘブル人」というのは直接にはユダヤ人を指していますが、もともとの意味は「旅する民」ですから、人生という旅をしている私たちへの手紙ということです。と解説があり、私たちの心をこの書へと誘ってくれています。

初期の時代に新約聖書は成立しておらず。礼拝では旧約聖書が用いられておりました。1 章 5 節から引用されている 7 つみことばは、御子キリストが旧約聖書でどのようなお方として預言されているかを示しています。それらは三つの御言葉に要約することができます。と

1 章 5 節「あなたはわたしの子。わたしは今日、あなたを生んだ」（詩 2:7）主イエスがバプテスマを受けられた時に、天から声のあったことが記されており、御子のご性質が神であることを示しています。

2 章 10-12 節「主よ。あなたははじめに地の基を据えられました。」（詩 102:25-28）御子が創造のみわざの初めにおられたことは、創世記 1 章 26 節の「われわれ」ということばでも明らかです。

3 章 13 節「あなたは、わたしの右の座についていなさい。わたしがあなたに敵をあなたの足台とするまで」（詩 110:1）

ヘブル人への手紙の著者が幾つもの旧約聖書を引用して語り伝えようとしていることは、困難と苦難の中にある旅する神の民に、力に満ちた神のことばを伝えようとしていることです。

旧約聖書に預言された神の御心は御子イエス・キリストにおいてことごとく成就したこと。また、たとえ人間の目には見えなくとも、この世界を創造し支えておられるのは、私たちの主なる神であられるということです。

人間的な目にはただ困難に見える状況の中でこそ歴史を貫(つらぬ)いて働かれる神とその御子を見上げ、そのみことばに聞きましょうという呼びかけなのです、と。

また、私たちを守り導いてくださるのは、父なる神と共に天地を創造し、万物を治めておられる主なる御子であり、この方が私たちの人生という旅路を共にしてくださっているのですから、とありました。言葉に言い表せない感動です。

〈みことばを味わおう〉のほとんどをなぞりましたが、私のこの世の旅路も終盤ですが、私に伴走して下さっているお方のことを思い、また教会生活に恵まれましたことは、感謝がつきません。（福島三弥子）

海と空造られた主は／　あなたの主、私の神、
罪を赦す救い主／　　みんなの主
イエスは主、ハレルヤ／　イエスは主、ハレルヤ／
イエスは主、ハレルヤ／　みんなの主　（プレイズワールドより）

ヨエル書は、あまりなじみがありませんでした。今回、南王国ユダが主の前に平安を得ていた時期の預言者とありました。そこにイナゴの大災害が起こりました。この災害がユダの民にとって悔い改める機会となった、とあります。

順境の時ばかりでは、神様から離れてしまいがちです。逆境の時も、うな垂れるのではなく、神様に全面的により頼む恵みの時であり、悔い改めと感謝の時と受け止めるように、と促されました。

「あなたがたは、年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず……」（ヘブル 5：12）

「固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」（ヘブル 5 ： 14）

幼子のままの己を恥じています。同時にこの経験によって訓練という文言に惹かれました。

信仰生活の中で迷ったり、座り込んだり大なり小なり様々な経験を重ねてきています。しかしその経験を通して善悪を見分ける感覚を身につけたかというと、はいと即答できません。同じような過ちを繰り返そうとしているなと、思うことがあります。

主の前に黙想しながら、経験を生かせる大人に成長させていただきたい、と願っています。（広瀬裕子）

私たちは、主を信じるまでは罪と死、サタンの支配する領域にいましたが、主を信じた時にキリストの死に結合され、私の古い人は死に、キリストの復活とも同じようにされて、キリストの支配する領域に移された新しい人となりました。

これが自分の事としてはっきりしたので、そういう話題が出てくる個所でも、頭、心がついてゆけるようになったと思いますし、常にキリストにある新しい人としての意識で生きれるように思います。

これはロマ書６章での大きな収穫です。感謝です。（高橋美枝）

乳を飲んでいる者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」（ヘブル 5:13-14）

人間の救いは、主イエス・キリストの十字架の贖いによって実現しました。その事実を信じた時に人はその立場を「罪人」から「罪に問われない人」に移されます。霊的な生まれ変わりです。

しかし聖化は、パソコンの初期化のように何事もなかったかのように私たちを真っ白にするわざではありません。もしそうであれば、私たちは大量生産品と同じようなものです。

聖化は、聖霊様を通して、私たち一人一人のこれまでの歩み、これからの歩みに寄り添ってなされるわざだと思います。赤ちゃんのように何もできないところから始まった私たちは、聖霊様に助けてくださいと祈りながら訓練を受け、信仰を成長させ固い食物を食べることを期待されているのです。

人が努力の実を尊び、達成感を味わう存在であるのも、もともとは主がそのように私たちを創られたからではないかと考えます。

その達成感を正しい方向で得ることが、この地上で天の御国を味わうことや主イエス様の香を放つことにつながるのではと思います。（永井亮子）

さあ、主に立ち返ろう。……主は二日の後に私たちを生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださる。私たちは御前に生きる。私たちは知ろう。主を知ることを切に追い求めよう。」（ホセア 6:1-3）

どのようにして主を知ることができるのでしょうか。ヨハネ福音書によれば

「わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。10　わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。11　わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。」（ヨハネ 14:9-11）

感謝なことに主イエス様を知れば知るほど、真の神・主を知ることになります。

さらに「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」（同 14:21）とあります。

主イエス様を愛するには、みことばを学び、知識を得て聴従する必要があります。主のことばに無知であってはなりません。さらに聖書を学び、主の御心を知り、真実の愛をもって応答してゆきたいと願っています。（木村邦夫）

主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。主が言ったように、シオンの山、エルサレムには逃れの者がいるからだ。生き残った者たちのうちに、主が呼び出す者がいる。」（ヨエル 2:31.32 ）

今、私たちが生かされている時代は、さまざまな困難に襲われ、世の終わりに向かっているかも知れません。「しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。」とあります。

イエス・キリストを信じ受け入れる人々に、神の愛と神の守りが与えられるのです。ただ主を信じて従順に歩む者と導いてください。（外處トミ）

主は我に　試練とともに　恵みなる
救いの道を　備え給えり

2023 年 6 月 30 日

主ご自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ、試錬の中にある者たちを助けることができるのである。」（ヘブル 2:18）

主は滅ぶべき私たちを救い出すためにこの世に来て苦しまれ、一度命まで捨てられました。それほどまでに私たちを愛してくださっていることを感謝します。主のみこころにかなう人生を日々歩んでいけますように。（外處光歩）

私たちの仲間も、実を結ばない者にならないように、差し迫った必要に備えて、良いわざに励むように教えられなければなりません。」（テトス 3:14）

神様が私たちを選び、神の国の相続人としてくださったことを感謝いたします。神の民として、よいわざに励み、御霊の実を豊かに結ぶことができますように。また、いつも主イエスがなしてくださったみわざを忘れることなく、主に信頼して歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

主は、地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」（創世記 6:5,6）

神様の愛によって神様のご栄光を表すために造られた人間が、サタンの惑わしによって罪を犯し、神様の心を痛めさせてしまう存在となってしまいました。

私たちは神様の心を痛める存在であり、私自身もその遺伝子を持つ裁かれるべき存在でした。

しかし、神様の御子が私たちの身代わりとなって下さり、流された尊い血潮によって私たちの滅びゆくべき立場から、神様の家族という計り知れない恵みの立場に移して下さいました。

私には全く何も出来ない罪人でしかなかったにも拘わらずにです。何という一方的な恵みでしょうか。

今までの私の人生を振り返っても、私はただ愚かだけであったにも拘わらず、忍耐強く私を導いて全てを成し遂げ続けて下さっていた神様の忍耐と力強いお導きを改めて示されます。

私にはまだ神様の心を痛めてしまう恐ろしい自我が今でも存在することを悲しく思いますが、そんな存在の私を今も、一方的に導き、救い、全てを与えて生かして下さっている神様に、ただ頭を垂れて感謝するばかりです。（外處徳昭）

こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。

21 また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、22 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。23 約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。24 また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」（ヘブル 10:19-25）

「こういうわけで」という言葉で始まっています。

ヘブル人への手紙全体を通して読むと、この 10 章 19 節を分岐点にして、大きく流れが変わっていることに気づきます。

これまでは、神の御子キリストが、いかにすぐれたお方であるかについて説明し、御使いよりもすぐれた方であり、すぐれた救いの道を備えられ、またアロンの祭司職よりも偉大な、メルキゼデクの祭司となられたことについて述べられています。

そして、モーセを通して与えられた神との旧契約は、新しい契約によって取って代えられて、この契約が古い契約よりも、すぐれていることが説明されています。

このように、キリストがいかにすぐれたお方であり、いかにすぐれた仲介の働きをされたかを述べた後で、10 章 19 節から、どう応答していくか、「勧め」に入ります。

聖所に入ることができます

その勧めは、「聖所に入ることができます、神のみもとの中にとどまることができます」という招きです。

イエスの血によって

その招きには、「イエスの血」によって応答することができます。聖所に入ることは、私たちの何かによっては不可能です。ヘブル９章では「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」（22 節）とありました。イエス様が十字架で死なれたのは、愛の模範を示すためではなく、血を流すためでありました。

大胆に

そして、「大胆に入ることができます」とあります。この「大胆に」という言葉は、法廷において、被告になっているけれども、自分は無罪であることを知っているので、確信をもって宣言することができるときに使われる言葉です。

自分には、聖所に入るのに、後ろめたいものは何一つない。イエス様の血によって、完全にきよめられたのだから、「確信をもって、大胆に入ることができる」というものです。ああ、何と感謝なことでしょう。

新改訳第 3 版までは 19 節にある「聖所」は「まことの聖所」と訳されていました。しかし、ギリシャ語原文には「まことの」という言葉はありません。この「聖所」は文脈から「天の聖所」を指していることが明らかです。それは、９章での「地上の聖所」（1 節）と対比して使われていました。

地上の聖所は、天におけるものの型であり、本物は天にあると書かれていましたが、イエス様がご自分の血を、「天の聖所」にたずさえて行かれたので、主イエスの御名を信じるすべての人が、キリストにあってこの「天の聖所」に入ることができるのです。今日は霊的に入っていますが、将来、教会が携挙されて、天の御座に挙げられた時には、「天の聖所」に入ることができるのです。

「イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」

「ご自分の肉体」とありますが、キリストは肉体をもってこの世に現われて、その肉体において、罪を負ってくださいました。10 章前半には、動物のいけにえと対比されて、イエス・キリストのからだが、いかに完全な罪の赦しを与えるかについて書かれています。

ここに「イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して」と書かれていますが、これはどういう意味でしょうか？。

旧約聖書の時代、人間が神様と出会う場所は元々「会見の幕屋」と呼ばれるテントであり、後にそれがエルサレムの神殿となりました。

その幕屋の一番奥に至聖所と呼ばれる場所があり、そこは神様がおられる場所だと考えられていました。そこには、ユダヤ教のトップである大祭司が年に一度、わずかの間だけ入ることが許されましたが、それ以外は誰も中に入ることはできませんでした。入れば死ぬからです。

その中に誰も勝手に入ることがないように、その場所には天井から床まで届く非常に分厚い垂れ幕がかかっていました。人間がなぜ神がおられる場所に入ることができないのかと言うと、罪汚れを持つ私たちは、聖なる神の前にいることができないからです。眩(まぶ)しい太陽を見ると眼がつぶれるように、光り輝く聖なる神の前に人間は立つことができません。

ところが、この「垂れ幕」は、主が十字架につけられていた時に、上から下に、真(ま)っ二(ぶた)つに引き裂かれました。この幕は厚さが 10 ㎝以上もあり、その両端を数頭の馬が反対方向に引っ張っても破れないほど丈夫なものであったと言われています。その幕が、イエス様が十字架で死なれた時に、上から下に、真(ま)っ二(ぶた)つに裂けたのです。

それは主イエスが十字架の上でご自分のからだを引き裂いてくださったことによって、神と人とを隔(へだ)てていた壁（幕）が引き裂かれ、神の御許に行くことができるようになったということを表しています。

このようにして、イエス様の肉体が引き裂かれたことによって、私たちのためにこの「新しい生ける道」を設けてくださったのです。

私たちには、偉大な祭司がおられる

聖所に入ることだけでなく、大祭司であるイエス様が私たちのためにとりなしの祈りをし、弁護者となってくださっています。かつてモーセは、神の家の中で、イスラエルの民のために、仲介の役を果たしていましたが、御子は、神の家の上におられる方です。すべてを支配しておられる方が、私たちの大祭司となっておられます。何とありがたいことでしょう。

全き信仰をもって

「心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」

「全き信仰をもって真心から神に近づこう」という勧めがあります。「心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ」とありますが、10 章前半では、動物のいけにえによっては、罪意識が取り除かれないどころか、かえって罪が思い出されると述べられています。

動物のいけにえによっては、罪をおおうことはしても、罪が取り除かれることはありませんでした。感謝なことに、イエス様が流された血は、私たちの心を、特に良心を完全にきよめて余りあるのです。何と感謝なことでしょう。（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ７月号の感想を８月 10 日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）